

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Making the Picture Book A Tale of Star Sand in Taketomi and Writing a Grammar Sketch for a General Audience

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 奈津子, 山田, 真寛, NAKAGAWA, Natsuko, YAMADA, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001417

竹富島『星砂の話』の絵本制作と一般読者向け文法概要の執筆

中川奈津子^a 山田真寛^b

^a 日本学術振興会特別研究員 (PD), 千葉大学/国立国語研究所 共同研究員

^b 国立国語研究所 IR 推進室

要旨

本稿は、竹富島に伝わる伝説『星砂の話』の方言絵本制作過程と、絵本に付属する一般読者向けの文法概要の執筆プロセスについて述べる。沖縄県の八重山諸島の一つ竹富島では、琉球諸語広域八重山語竹富方言が話されており、流暢な話者はほとんど70代以上に限られる消滅危機言語である。まず、この絵本制作企画が属する、「言語復興の港」プロジェクトについて概観し、なぜ言語学を専門とする著者らが他分野のプロフェッショナルや地元の人々と協働して絵本（や他の企画では方言グッズなど）を制作しているのかについて概観する。そして、この絵本の想定読者に向けて、絵本の内容を方言で理解できるようになることを目標にした一般読者向けの文法概要の執筆過程について説明する。表記法（そして竹富方言の発音方法）、格助詞・係助詞、動詞・形容詞・終助詞の説明など、一般向けにわかりやすく書くことに気をつけるだけでなく、必ずしも言語学的でないが一般読者が疑問に思いがちなこと（e.g., XとYのどちらが「正しい」のか）にも留意して執筆した。また、専門的な文法概要のように必ずしも網羅性には配慮せず、絵本の表現を理解できるようになることを目標に執筆した。このことの利点と欠点に関しても簡単に触れる。最後に、文法概要とそれに含まれる物語本文を収録した。本稿が、今後同様のコンテンツを作ろうとする人々の一助となれば幸いである。

キーワード：消滅危機方言、言語復興コンテンツ、琉球諸語、八重山語、竹富方言

1. はじめに

本論文では、著者らが取り組んでいる消滅危機言語の絵本制作とその普及の取り組みについて紹介し、具体例として、竹富島の伝説「ふしぬいんのぬはなし（星砂の話）」の絵本制作と、これに付属する非言語学者向けの文法概要執筆の過程を述べる（2節）。また、この絵本と文法概要の期待される使われ方を提案し（3節）、一般向け文法概要作成にあたって注意した点を述べる（4節）。最後に、絵本に付属させる予定の、竹富方言に関する一般向けの文法概要を収録している（5節）。

本節では、著者らの取り組んでいる言語復興プロジェクトについて概観し（1.1節）、次に竹富島に伝わる伝承『星砂の話』の概略を述べる（1.2節）。

1.1 「言語復興の港」プロジェクト

著者らは「言語復興の港」プロジェクト¹という、地域言語の保存・再活性化のための取り組みを行っている。代表者は第2著者の山田であり、琉球列島の各地域の言語を研究する研究者だ

¹ 言語復興の港プロジェクト <http://plrminato.wixsite.com/webminato>

けでなく、作家やデザイナー、地域言語の母語話者や継承者などと協働して活動を行っている（山田 2016）。第 1 著者の中川は、このプロジェクトの一部である竹富島の伝説『星砂の話』（後述）の絵本化のため、伝説を話者から竹富方言で聞き取り、文字化し、グロス・訳文を作り、絵本に付属する文法概要を書く作業を行っている。本プロジェクトでは、竹富島以外の琉球諸語が話されている地域（与那国島、沖永良部島、多良間島など）でも、地域言語を利用した絵本や、楽しみながら地域言語に触れられるもの（バッジ、スタンプ、絵カード、写真冊子など）を制作している（山田 2016, Yamada et al. 2017, 山田ほか 2017）。琉球諸語研究者が行っている文法・語彙調査やテキスト収集など学術研究の成果を、デザインや芸術の力を使って、より広く・よりわかりやすく地域言語コミュニティに伝える手段として、これらの制作物を利用している。

1.2 星砂の話

あらかじめ『星砂の話』の概略を述べておく。この話は竹富島の砂浜に見られる星型の砂（星砂）にまつわる伝承で、なぜ星砂が竹富島にあるのか、また御嶽でこの星砂を使った神事を行う由来について述べられている。

昔、子の方向にある星と午の方向にある星の夫婦がいて、子どもができたので天の大明神にどこでお産をしたら良いか尋ねたところ、竹富島の海を勧められた。母星（午の方向にある星）は言われたとおりにそこで星の子どもをたくさん産んだが、これが海をあずかる七竜宮神の怒りに触れ、星の子どもはすべて殺されてしまう。この星の子どもの残骸が骨となって竹富島の浜に打ち上げられたのである。東美崎御嶽の神女はこれを哀れに思って、星の子どもでもある星砂を拾い集めて天に返すという行事を毎年行うようになった。このおかげで星の子どもたちは天に昇ることができ、午の方向にある母星のそばでたくさんきらきらと星が輝いている。（物語全文は 5.7 節に収録している。）

絵本は、以上の話が竹富方言で語られたもの、その翻訳とイラストからなり、そして絵本の物語テキストが理解できるように書かれた一般読者向けの文法概要、朗読音声が付属する。

2. 竹富島の『星砂の話』とその制作過程

『星砂の話』の絵本を作ることになったのは、2015 年にデザイナー・イラストレーターである山本史氏（京都市立芸術大学）がこの民話をモチーフにして絵を描いたことから始まる²。この話が、知り合いを介して、当時すでに琉球列島のことばを使った絵本やグッズを制作していた山田（第 2 著者）に伝わり、竹富方言が属する琉球諸語－広域八重山語の白保方言を調査していた中川（第 1 著者）が参加した。また山田とともに琉球沖永良部語の創作物語絵本『みちゃぬふい（土の声）』（松村ほか 2016）を制作した浅川友里江氏（京都大学学術情報メディアセンター（当時））が、『みちゃぬふい』のデザインを応用して装丁デザイン・レイアウトを担当している。また、文法調査にあたって広域八重山語黒島方言を研究している原田走一郎氏（国立国語研究所）の助

² 山本史「個展 星砂のはなし」, 2015 年 3 月, The 14thmoon LIMITED, Gallery MANIFESTO, 大阪市。

言も受けている。竹富島では中川が2015年12月から2017年2月の間に9回(『星砂の話』に関連しない調査も含めると22回)調査を行っている。また、山田が物語再話収録や絵本出版に関する相談などのために3回、山本史氏と浅川友里江氏が作画のための取材やデザインの相談のため1回ずつ、竹富島を訪れている。

絵本制作の手順を竹富方言テキストに関する部分だけに限って述べる。まず最初に、物語テキストを決定することから始めた。『星砂の話』の伝承は上勢頭(2013)など数カ所の文献で確認できるが、絵本の朗読の参考にしたり、あるいは読み聞かせなどの目的で朗読できない利用者が朗読の代わりに利用するため、絵本とともに音声も提供したいと考えていた。また、竹富島内の文化施設「ゆがふ館」では、内盛正子氏が語った『星砂の話』の音声が開示されているが、この音声を絵本に付属させ、そのまま絵本のテキストとして再配布することは様々な制約上困難であった。そのため、著者らはこの伝承を伝え聞いていて、しかも竹富方言で語ることで話者を新たに探すことにした。幸い竹富島は文化の保護に力を入れており、「NPO法人たきどうん」という竹富島の文化遺産を研究・保全する目的の団体もあり(先述の「ゆがふ館」も運営している)、話者探しだけでなく伝承を絵本にするための島内の許可の有無など様々な相談に乗っていただくことができた。この結果、母親から『星砂の話』を聞いていたという内盛スミ氏に再話の協力を得られることになった。

内盛スミ氏は、自分の伝え聞いていた『星砂の話』をメモとして残しており、これをもとに表現や文法などを細かく修正して、再話、朗読して下さった。朗読は、必ずしも書いたとおりに行われなかったため、実際の朗読を録音した音声ファイルを著者らが再度、表記法なども改めながら平仮名で書き起こし、内盛スミ氏の確認を経てテキストの決定版とした。「言語復興の港」プロジェクトで制作している民話をもとにした絵本はすべて、このように再話者の実際の朗読音源を書き起こし、再話者の確認を経たものを絵本の物語のテキストデータとして使用している。こうすることで絵本の物語テキストデータとして使用する「書かれたもの」と音声データを一对の言語資料として扱うことができる。

物語テキスト決定後にテキスト中の語や接辞の意味を、前本隆一氏に詳しく聞いた。前本氏は竹富の方言大会を長年指導して来られ、古謡の研究もされているので古いことばにも詳しい。前本氏には、長母音の有無や表現選択の好みの違いが若干あったようだが、内盛氏の発音・表現を尊重した。また、同じく方言大会を長年指導しておられる古堅節氏にも同様のことを聞いた。これと並行して、絵に関して、登場人物の着ているものや香炉の形などに違和感がないか、複数の地元の人にたずねた。絵は全員に好評であったが、元の絵で神々が着ているものが一般的な琉装であったのを、伝統的な竹富島の服装に近いものに変えるなど、島民のフィードバックを参考に地域文化を反映させるよう修正した部分もある。

『星砂の話』は口承の伝説であるため、いくつかのバリエーションが存在する。星の子どもをかみ殺すものは、内盛スミ氏の再話では大蛇となっているが、龍だと伝え聞いた人もいるほか、鯨などの大きい魚だとするバージョンもある。これも内盛氏の聞いた伝承を物語本文では尊重し、他のバージョンもあること、どれが「正しい」伝説であるとは言えないことを注記している。

3. 絵本と文法概要の期待される使われ方

地域言語の絵本は、地域言語コミュニティや、その地域に興味を持った地域外の人、観光客などが地域言語に触れる機会を増やし、地域言語の認知や使用・学習を促すことを目的として制作されている。しかし、一般の絵本とまったく同じように、絵がきれい、楽しそう、面白そうなどという動機で自然と読まれることも目指している。また小さい子どもにとっても魅力的なものを制作し、彼らに対して読み聞かせることを動機として、受動的言語能力を持つ者が多い「親の世代」(“parental generation”, UNESCO ad hoc Expert Group on Endangered Languages 2003)の地域言語使用・学習が促進されることを期待している。このため、絵本じたいには注釈などの煩雑なものなるべく入れず、1ページの文字数も少なめになっている。絵本じたいの言語学的な情報量の少なさは付属する文法概要で補い、絵本を読み込んだ人がある表現にふと疑問を持ったたり、馴染みのない文字の読み方をきちんと知りたくなったときの助けになることを想定して文法概要を執筆した。

物語そのものの魅力と合わせて、多量のテキストを親しみやすいイラストで補うことでビジュアルコミュニケーションをうみ、さらに母語話者にとっても馴染みのない文字化された地域言語を「読む」ことは、朗読音声と詳しい言語学的な解説で補っている。このように「魅力的な絵本、朗読音声、言語学的な解説」を一つのパッケージとした地域言語コンテンツを制作し、楽しみながら地域言語の使用・学習が促進されることを目指すのが、本プロジェクトの一つの特徴である。



絵本『星砂の話』の挿絵から (山本史 作)

4. 一般向けの文法概要を書くにあたって

竹富方言の一般向け文法概要を書くにあたって、一般読者が疑問に思いそうなこと、誤解しがちなこと、地元の人々のこだわりなどに留意した。以下、そのいくつかを概観する。項目ごとにそれぞれ、表記法（4.1 節）、助詞（4.2 節）、動詞・形容詞（4.3 節）を解説する上での留意点を概観した。

4.1 表記法

表記法の概要を書くにあたって仮定した竹富方言の音韻を、表 1 と表 2 に示す（西岡・小川（2001）、ローレンス（2012）を参照し、独自調査に基づき作成）。鼻母音は現在確認されている範囲内で記した。長子音は表には入れなかった。本稿での竹富方言の表記は絵本と概要の表記にそろえて、以下の母音と子音からなる 5.2 節の平仮名表記を用いるが、音声記号への復元は可能である。

表 1 竹富方言の母音

High	i	u / ū:
Mid	e / ě:	
Low	a / ā:	o / ō:

表 2 竹富方言の子音

	Bilabial	Alveolar	Post alveolar	Palatal	Velar	Glottal
Plosive	p b	t d			k g	
Affricate		ts	tʃ			
Fricative	ɸ	s ~ ɕ z ~ ʒ				h
Tap		r				
Nasal	m	n				
Approximant				j	w	

正確かつ容易に使用できる表記法をめぐる問題としてまず、物語本文を（拡張）平仮名・片仮名のどちらで書くかということがある（仲原 2017、本稿 5.2 節）。特に地元の母語話者の中には、方言を平仮名あるいは片仮名で書くべきであると考えている人たちがいる。ここには意見の対立があるため、すべての人の意見を反映させることは論理的に不可能である。本書では、以下のような理由から平仮名を用いることにした。(i) 小さい子どもにも読んでもらえることを想定して、子どもが他の絵本などでも慣れ親しんでいること、(ii) 絵本が読み上げられることを前提に、読み上げる人に読みやすい文字であること。(ii) に関して補足すると、片仮名は中国語以外の外来語の表記に使われたり、マンガなどにおいて外国人がつたない日本語を話すときの台詞を表すのに使われたりすることからもわかるように、どこか異国風のぎこちない読み方を誘発するようと思われる。もちろん竹富方言は日本語とまったく異なる点とかなり類似した点が混在しているが、この文法概要は日本語からの類推から竹富方言の仕組みが理解できるように意図されている。したがって、表記法も異国風の日本語との違いが強調される片仮名よりも、日本語の普通の文を書くときと同じ作法で書くように平仮名を選択した。

この文法概要は全体を通して、日本語を理解する学習者のために日本語からの類推で竹富方言を解説し、その後に違いを述べる構造になっている。琉球諸語の文法記述という観点から見れば、竹富方言を独立の言語ではないかのように扱う説明のようにとらえられかねない。しかし対象言語が消滅危機言語であり、継承の担い手である読者の理解と学習の効率を重視し、このような書き方を採用した。しかし、例えば表記法に関しては、日本語の平仮名で書かれていても竹富方言の発音を正確に反映しているものではないこと、文字だけでは発音のすべては伝わらず手がかりに過ぎないということなどを述べるなど、竹富方言の独立性に関して読者に誤解を与えないよう留意した。

その他、表記法に関する細かい問題としては、「さ」と「しゃ」の書き分けがある。例えば絵本の本文中に出てくる「あいみしゃし」（御嶽名）は、他の文献では「あいみさし」と表記されていることもある。これも「さ」と表記すべきと考える人と、「しゃ」と表記すべきと考える人がいるが、著者らの調査によれば、[sa]と[ea]は他の八重山方言と同様、自由変異である。しかし日本語では「さ」と「しゃ」は区別され、この絵本の想定読者のほぼ全員が日本語も理解できるので、[ea]と発音されているところに「さ」と書かれていたら違和感があると思われる。したがってここでは、音声提供者の内盛スミ氏の発音に忠実に「しゃ」の表記を採用した。

特に短い語は、人によって短く発音したり長く発音したりする変異が認められた。例えば“方向”という意味の「ふぁー」は、「ふぁ」と発音する話者もいる。通常、2モーラ制約により「ふぁ」が「ふぁー」と発音されているが、物語中では「ふぁー」に場所を表す助詞「=な」が後続していることから、「ふぁー」に対する2モーラ制約が適用されないことがあり、「ふぁー=な」と「ふぁ=な」のバリエーションが話者によって存在していると考えられる。ここでも音声提供者の内盛スミ氏の発音に忠実に、長母音に聞こえるところはそれを表す記号「ー」をつけて表記することとした。

最後に、シュワ [a] を音韻として平仮名表記すべきかという問題について少し触れる。多くの研究が竹富方言の [a] の存在を指摘している (e.g., ローレンス 1999, 西岡・小川 2011: 4-5)。例えば (1) のような例がミニマルペアとして報告されており (西岡・小川 2011: 4), 第1著者の調査でも実際にこのように発音している話者がいることを確認した。

- (1) a. pai “楸” b. pɔi “灰”

しかし、ローレンス (1999) は詳しい分析を行い、文献によって、また話者によって [a] を含む語には違いがあることを指摘し、「[a] は特定の環境（母音の直後）において /a/ の異音として現れる」（ローレンス 1999: 176）と論じた。これに従って、この絵本と付属の文法概要でも [a] と [a] は区別して表記していない。

4.2 助詞

助詞の説明は、やや不正確ではあるが「てにをは」の説明として、日本語から類推できるような解説を心がけた (5.3 節)。また、助詞じたいの機能（文法関係の標示）を、日本語を例に直感

的にわかりやすく説明し、助詞のはたらきと必要性も解説した。

日本語からの類推で説明するというやり方は、まるで日本語と竹富方言の表現が1対1対応しているかのような誤解を招くという危険性がある以外はおおむね効率的な学習が期待できると思われるが、焦点助詞「どう」は日本語に対応するものがない。このため、八重山で使われる日本語における「が」（焦点助詞のように使われることがある）との類似点によって説明した。

また、この文法概要の目的が絵本の物語を竹富方言で理解できるようになることであるため、概要の例文を絵本に出てくる表現に限定したが、必ずしも典型的な例が出てきていないので、説明が煩雑になったところもあるかもしれない。例えば助詞「ん」（累加の“も”に相当）は、累加の意味では出てこず、否定極性項目「のーしてい＝ん」「何して＝も」の一部として出てきている。幸いなことに累加も否定極性項目の場合も、日本語で「も」を使用するため、非典型的な例でも類推できるという利点はあるかもしれない。

4.3 動詞・形容詞のパラダイム

動詞と形容詞のパラダイムは、すべてを示さず、物語中に出てくる動詞・形容詞接辞に限定した。その結果、動詞の接辞は非過去、過去、否定、連用の四つのみ、形容詞の接辞は名詞修飾のみ導入することになった。言語学者向けの文法概要のような網羅的なパラダイムの提示はあえて目指さず、あくまでも絵本に出てくる動詞・形容詞接辞が理解できるようになることを目指した。特に初学者にとっては、たとえ網羅的であっても一度に多くの情報を提示すると逆に焦点がぼやけると判断したためである。この概要を見て興味を持った読者には、更に詳しい一般向け文法概要があることが望ましいが、残念ながらまだない。今後の研究の進展が待たれる。

また実際的な問題として、時間的な制約により、動詞の網羅的なパラダイムの記述などの文法項目を十分に調査するまでには至らなかった。それでも、『星砂の話』を理解するという明確な目標を持った上で、我々のわかった範囲内のことを伝える文法概要が絵本に付属する価値はある。よほどの強い関心を持たないと、一般読者が竹富方言の文法に関する文献にまでアクセスすることはないと思われる。これに対して文法概要を予め絵本に付属させておけば、竹富方言の文法にアクセスする労力を払わずして知識を得ることができる。また、網羅的な参照文法を完成させるには少なくとも5年以上必要だが、非網羅的な文法概要はこれよりも早く仕上げることができるので、早く読者に情報を届けることができる。

以下5節で、絵本に付録する一般向け文法概要本文と日本語訳付き物語全文を紹介する。節番号と例文番号は本稿全体の通し番号を付している。

5. 竹富ことば（てーどうんむに）の概要

5.1 はじめに

この概要は、竹富のことばをまったく知らない人が『星砂の話』を読んで/聞いて理解できるようになることを目標に、竹富のことばを解説します。“竹富”は竹富のことばでは「てーどうん」、 “ことば”は「むに」といいます。“竹富のことば”は「てーどうんむに」といいます。

て一どうんむには、鹿児島県大島郡の奄美群島から沖縄県八重山郡の与那国島までで話されている琉球諸語の一つで、日本語の方言や「うちなーぐち」とも呼ばれる沖縄本島南部のことばとも違うことばです（お互いに通じません）。石垣島から船で南に約 10 分で行ける、沖縄県八重山郡竹富町にある周囲約 9 km の竹富島で、おじいさんおばあさんが日常的に使っている言語です。ユネスコが報告している、いま何もしなければ今世紀中に消滅してしまう可能性のある「消滅危機言語」の一つに数えられている八重山語の一つで、石垣島や、波照間島や黒島など竹富町の他の島のことばと姉妹関係にあることばです。この絵本・概要は、竹富のことばを次世代に継承するために使えるようにつくられました。

て一どうんむには、この本ではひらがなで書かれています。ひらがなの方が小さい子どもにも慣れ親しんでもらえるだろう、という理由からです。ひらがながずらずらと続くと読みづらいので、小学校の国語の時間に習う“文節”に相当する単位で空白をもうけています。例えば「ふしぬいんのぬはなし」「星砂の話」は(2)のように分けて書かれます。イコールサイン(=)や後に出てくるプラスサイン(+)は、文節より小さい単位の分け目を表すのに使われています。

- (2) ふし=ぬ いんの=ぬ はなし ← て一どうんむに
 星=の 砂=の 話 ← 直訳
 “星砂の話”[1] ← 意識 [物語文の番号]

て一どうんむにのすぐ下の 2 段めには、て一どうんむにの雰囲気を残してできるだけそのまま日本語に置き換えたもの(直訳)、そしてその下の 3 段めには日本語としてわかりやすく書き換えたもの(意識)を書いています。3 段めの最後に書いてある角括弧で囲まれた[数字]は、物語本文(5.7 節)の文番号を表しています。例えば、「『ふしぬ』の『ぬ』はどういう意味なんだろう」という疑問が浮かんできたときは、2 段めの直訳を見るのがオススメです。「ふし=ぬ」の直訳として“星=の”と書かれているので、「『ふしぬ』の『ぬ』は日本語の『の』と似ているんだな」とわかります。すると、「『いんのぬ』の『ぬ』もさっきの『ぬ』と同じで日本語の『の』に似ているものなんだな」と、段々て一どうんむについてわかっていくことが増えてきます。ただし、て一どうんむにと日本語は違うことばです。「似ている」だけで「同じ」ではありませんので注意してください。

細かいことを気にせず「とりあえず文全体でどういう意味なのか知りたい」という人は、3 段めの意識を見てください。「ふしぬいんのぬはなし」のそれぞれの部分はどういう意味なのかはさておき、全体として『星砂の話』という意味だということがひと目でわかります。

て一どうんむにがわからない人にとっては、1 段めと 2 段めのように、文節ごとにスペースをあけて、この単位ごとに直訳がつけてある書き方だと、ことばを覚えるときにとても役に立ちます。また、て一どうんむにがわかる人にとっては、ひらがなだけで書くより漢字を使って書いた方が読みやすいかもしれません。しかして一どうんむにがわからない人は、漢字で書かれたものをて一どうんむにでどのように発音するかわかりません。漢字を使う場合は、ひらがなで振り仮名をつけることを推奨しています。

5.2 発音とかな表記

この節では、てーどうんむにの発音と表記について、主に日本語と対比しながら説明します。「はじめに」でも触れましたが、てーどうんむにと日本語は違うことばですので、平仮名で書いてあっても日本語とまったく同じ読み方をするわけではありません。仮名はあくまでてーどうんむにの音のヒントにしかなりません。(ローマ字で書かれた日本語を、日本語がわからない人が自然に読めないのと同じです。)

てーどうんむにの母音は日本語と同じ「あいうえお」です。これに加えて、てーどうんむには、鼻母音と呼ばれるフランス語などにある鼻にかかったような母音があります。『星砂の話』には出てきませんので詳しい説明は省略しますが、(3) のように書くことができます。「～」で前の文字の母音が鼻母音であることを示し、(3) の場合は「す (su)」の「う (u)」の音が鼻母音化した音であることを示しています。

(3) す～る [sūru]

頭

「てーどうん」「竹富」の「どう」や、「にぬふあー」「子の方角」の「ふあ」などの音は、日本語では、「トゥードウーリスト (To Do list)」「ファンタジー (fantasy)」など外来語を表すのにしか使われませんが、てーどうんむにではてーどうんむに本来の音を表すのに普通に使われます。一方、「さしすせそ」と「しゃししゅしえしよ」、「ざじずぜぞ」と「じゃじじゅじえじよ」は明確に区別されておらず、ほとんどの場合はどちらで発音しても良いようです。『星砂の話』を仮名で書くときには、朗読音声にある、発音された音に近い方で書きました。例えば、“東美崎”の発音は「あいみさし」でも「あいみしゃし」でも良いようですが、ここでは「あいみしゃし」のほうが実際の朗読音声に近いのでこちらの表記を採用しています。

次頁にてーどうんむにを書くための平仮名とローマ字の一覧を載せました。この表記法は、『琉球のことばの書き方』(小川晋史(編) 2015, くろしお出版)をもとに作っています。てーどうんむにとしてあまり使わない仮名もあるかもしれませんが、念のために載せています。ローマ字表記のスラッシュ(例えば, sha/sya)は、どちらの表記を使っても良いことを表しています。でも前の表記を使うかあとの表記を使うかは一貫していたほうが良いです。例えば, sha と syi を同じ文章の中で使うのは一貫していないので望ましくありません。

表3 てーどうんむにの表記法

	a	i	u	e	o		a	i	u	e	o
	あ	い	う	え	お						
	a	i	u	e	o						
k	か	き	く	け	こ	g	が	ぎ	ぐ	げ	ご
	ka	ki	ku	ke	ko		ga	gi	gu	ge	go
s	さ		す	せ	そ	z	ざ		ず	ぜ	ぞ
	sa		su	se	so		za		zu	ze	zo
c	しゃ	し	しゅ	しえ	しよ	z	じゃ	じ	じゅ	じえ	じよ
	sha/sya	shi/syi	shu/syu	she/sye	sho/syo		ja/zya	ji/zyi	ju/zyu	je/zye	jo/zyo
t	た	てい	とう	て	と	d	だ	でい	どう	で	ど
	ta	ti	tu	te	to		da	di	du	de	do
ts	つあ		つ		つお						
	tsa		tsu		tso						
tc	ちゃ	ち	ちゅ	ちえ	ちよ						
	cha	chi	chu	che	cho						
n	な	に	ぬ	ね	の						
	na	ni ³	nu	ne	no						
h	は	ひ		へ	ほ						
	ha	hi ⁴		he	ho						
φ	ふあ	ふい	ふ	ふえ	ふお						
	hwa	hwi	hwu	hwe	hwo						
p	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	b	ば	び	ぶ	べ	ぼ
	pa	pi	pu	pe	po		ba	bi	bu	be	bo
m	ま	み	む	め	も						
	ma	mi	mu	me	mo						
j	や		ゆ	いえ	よ						
	ya		yu	ye	yo						
r	ら	り	る	れ	ろ						
	ra	ri	ru	re	ro						
w, etc.	わ	っ	ん	ー	〜						
	wa	子音を 重ねる	n	母音を 重ねる :	母音を ~を付 けて重 ねる						

³ [ɲi]⁴ [çi]

て一どうんむにを書くときは、日本語とは異なり、「っ」や「ん」から始めることができます。例えば、(4) は「っす」「フン」のように、ことばが「っ」から始まっています。慣れていないと発音が難しいかもしれませんが、「いっすんぼうし」と発音してみて、最初の「い」を言うのをやめてみてください。するとかなり近い発音になると思います。

- (4) ふし=ぬ ふぁー=ぬ ふに=や **っす**=つてい なり
 星=の 子ども=の 骨=は フン=と なって
 “(大蛇に食べられた)星の子どもの骨はフンとなって” [19]

(5) は、「んま」「午」のように、「ん」から始まっています。これは比較的簡単に発音できるでしょう。初めに口を閉じ、「ま」と言うときよりも、口を開けるのを1拍遅くします。

- (5) **んま**=ぬ ふぁー=な ある ふし=や
 午=の 方向=に ある 星=は
 “午の方角にある星は(お母さんと言って)” [4]

5.3 てにをは

この節では、日本語の「てにをは」に当たる部分を解説します。「てにをは」は文を理解する上でとても重要です。例えば、(6) と (7) では、「が」と「を」の場所が入れ替わっているだけです。文の意味はまったく違ってきます。

- (6) 海の大蛇**が**星の子ども**を**かみ殺した
 (7) 海の大蛇**を**星の子ども**が**かみ殺した

(6) では、かみ殺したのは「海の大蛇」、かみ殺されたのが「星の子ども」です。一方、(7) では逆で、かみ殺したのは「星の子ども」、かみ殺されたのが「海の大蛇」です。このように、「てにをは」は、文の中で、動作の主体や対象などを示す役割を果たしています。この節では、例えば「て一どうんむにの「ぬ」は、日本語の「の」に相当します」のように、日本語で知っていることを利用してて一どうんむにのことを理解できるように説明します。しかし日本語とて一どうんむには違うことばなので、あくまで「似ている」だけだということに注意してください。では、て一どうんむにの「てにをは」(助詞)に当たるものを見ていきましょう。次頁に表の形で簡単にまとめました。

表4 て-どうんむにの「てにをは」(助詞)

助詞	日本語訳	使い方とその日本語訳
ぬ	の/が	ふし=ぬ いんの 星=の 砂 [1] ふぁー+ふし=ぬ=どう ひかりていん ゆー 子ども+星=が=ぞ 光っている 丁寧 [31]
ゆ	を	いんな=ぬ ふーむぬ=ゆ ひかいてい 海=の 大蛇=を 使って [17]
い,に,な	に	ばい=ぬ いんな=い うりてい 南=の 海=に 降りて [8] ていん=ぬ だいまよーしん=に っしゃりた 天=の 大明神=に お話をした [6] どうー=ぬ すば=な にかい 自分=の そば=に 祈り [23]
し	で	しま=ぬ かんぶなじ=ぬ うかぎ=し 島=の 神女=の おかげ=で(星の子どもは天に昇ることができた) [28]
てい	と	いちか うい+ていん かいし ぴーるん=てい かんがい いつか 上+天 返して あげる=と 考えて [24] [25]
はら	から	かいし ぴーるん=てい かんがい おーったる くとう=はら 返して あげる=と 考えて いらっしゃった こと=から (香炉の星砂を入れ替える習慣が残った) [24] [25]
や	は	ふし=ぬ ふぁー=ぬ ふに=や つす=てい なり 星=の 子ども=の 骨=は フン=と なって [19]
ん	も	のーしてい=ん ゆるさるぬ=てい 何として=も 許されない=と [16]
どう	ぞ(が)	ふぁー+ふし=ぬ=どう ひかりていん ゆー 子ども+星=が=ぞ 光っている 丁寧 [31]

5.3.1 ぬ

まず、(2)にも出てきましたが、(8)の「ぬ」は日本語の“の”に似ていて、名詞(人やもの名前)と名詞をつなぐ役割を果たしています。例えば(8)では、「ふし」「星」と「いんの」「砂」、
「いんの」「砂」と「はなし」「話」がそれぞれ「ぬ」でつながられています。

- (8) ふし=ぬ いんの=ぬ はなし
星=の 砂=の 話
“星砂の話” [1]

これだけでなく、「ぬ」は日本語の“が”のような役割も果たしています。この場合の「ぬ」は名詞と名詞をつないでいるわけではなく、「ぬ」がつく名詞が、文が表す動作をしているもの(動作の主体)であることを表しています。例えば(9)では、“光る”という動作をしているのが“星”であること、つまり“光っているのは星だ”ということを表すために、「ふし」「星」に「ぬ」がついています。これによって“光っている場所”とか“光っている時間”とかを表しているのではなくて、“光っているもの”を表しているということが明確になります。

- (9) ほーらさ ある ふぁー+ふし=ぬ=どう ひかりていん ゆー
 たくさん ある 子ども+星=が=ぞ 光っている 丁寧
 “たくさんの星の子どもが光っています” [31]

5.3.2 ゆ

「ゆ」は日本語の“を”に相当し、動作の対象を表しています。例えば、(10)では、“使う”という動作の対象（使われるもの）が“大蛇”であるということ、つまり“使われたのは大蛇だ”ということを示すために「ふーむぬ」「大蛇」に「ゆ」がついています。

- (10) いんな=ぬ ふー+むぬ=ゆ ひかいてい
 海=の 大きい+もの=を 使って
 “(七竜宮神は)海の大蛇を使って” [17]

(11)でも同様に、“かみ殺した”という動作の対象（かみ殺されたもの）が“星の子ども”であるということ、つまり“かみ殺されたのは星の子どもだ”ということを示すために、「ふしぬふぁー」「星の子ども」に「ゆ」がついています。

- (11) ふし=ぬ ふぁー=ゆ とーってい かみ+くらすた
 星=の 子ども=を 全部 かみ+殺した
 “星の子どもをみんなかみ殺した” [18]

5.3.3 い, に, な

「い」「に」「な」は、どれも日本語の“に”に相当します。動作や移動の目的、場所などを表します。詳しい使い方の違いなどは、詳しい文法調査をしていないためまだわかっていません。ここではすべて“に”と訳しています。(12)と(13)に見られるように、てーどうんむにの「に」と「い」は動作の目的地を表していると考えられます。(12)では、“降りる”目的地が“海”であること、(13)では、“お話をする”という動作の目的地（お話の声の目的地）が“天の大明神”であることを表しているように見えます。

- (12) かいさる ひるさる ばい=ぬ いんな=い うりってい
 美しい 広い 南=の 海=に 降りて
 “美しい広い南の海に降りて” [8]

- (13) ていん=ぬ だいまよーしん=に っしゃりた
 天=の 大明神=に お話をした
 “天の大明神にお話をした” [6]

「い」と「に」には動作の方向性が関係しているようでしたが、「な」は動作の場所を表していると考えられます。例えば(14)では、祈る場所として“自分のそば”が示されているように見えます。

- (14) どうー=ぬ すば=な にかがい
 自分=の そば=に 祈り
 “自分のそばで祈って” [23]

この場合、てーどうんむにの「な」は、共通語の“に”に加えて“で”と訳したほうが適切なときがあります。しかし、共通語の“で”は、次節の「し」の訳にとっておきたいので、「い」「に」「な」はここではまとめて“に”と訳しておきます。別の文では、「にぬふぁー」「子の方角」に「な」がついて、「ある」「存在する」という動作（“存在している”という状態）の場所が“子の方角”であることを示しています。この場合は共通語の「に」に近いですね。

- (15) に=ぬ ふぁー=な ある ふし=や いーじゃ=つてい いじ
 子の 方向=に ある 星=は お父さん=と 言って
 “子の方角にある星はお父さんと言って” [3]

5.3.4 し

「し」は日本語の“で”のように、手段・道具を表します。“包丁で大根を切る”といったときの“で”が典型的です。この場合、“包丁”は大根を切るための手段あるいは道具です。このような場合、てーどうんむにでは「し」を使います。（『星砂の話』には出てきませんが、「さーに」も似た機能を持っています。）『星砂の話』に出てくる「し」は（16）で、手段というよりは原因というほうが近いですが、手段と原因は似ていることがあるので、てーどうんむにでは同じように表現されているのでしょう。

- (16) しま=ぬ かんぶなじ=ぬ うかぎ=し
 島=の 神女=の おかげ=で
 “(竹富)島の神女のおかげで(星の子どもは天に昇れるので)” [28]

5.3.5 てい

「てい」は日本語の“と”（「～と言う」の「と」）に相当し、引用のなかみを示します。（17）では御嶽の神女が考えているなかみ（“いつか天に返してあげよう”）に「てい」がくっついています。

- (17) いちか うい+ていん かいし ぴーるん=てい かんがい おーったる くとう=はら
 いつか 上+天 返して あげる=と 考えて いらっしやった こと=から
 “(御嶽の神女が)いつか天に返してあげようと考えていらっしやったことから” [24][25]

同じように、（18）では“言う”のなかみである「いーじゃ」「お父さん」に「てい」がくっついています。

- (18) に=ぬ ふぁー=な ある ふし=や いーじゃ=つてい いじ
 子=の 方向=に ある 星=は お父さん=と 言って
 “子の方角にある星はお父さんと言って” [3]

5.3.6 はら

「はら」は日本語の“から”に相当し、移動の起点や原因などを表します。(19)では、御嶽の神女の習慣の由来(星の子どもを天に返してあげようと思ったこと)に「はら」がくっついています。由来も原因の一種と見て良いでしょう。

- (19) かいし ぴーるん=てい かんがい おーったる くとぅ=はら
 返して あげる=と 考えて いらっしやった こと=から
 “(いつか天に)返してあげようと考えていらっしやったことから(御嶽の神女が香炉の灰の星砂を毎年入れ替える習慣が残っている)” [24][25]

5.3.7 や

「や」は日本語の“は”に相当し、文の主題(文が何について話しているか)を示します。一度出てきた登場人物やものについて、どうなったか?という話を続けるときに使われやすいです。例えば(20)では、お母さん星がこれ以前に登場していて、“それからお母さん星はどうしたか?”という話が続けて展開されているので、この「あんまーふし」「お母さん星」に「や」がつけられています。

- (20) あんまー+ふし=や いじ おーる とぅーる
 お母さん+星=は 言い なさる とおり
 “お母さん星は(大明神が)おっしやったとおりに(竹富島に降りてお産をしたが)” [10]

(21)でも同じように、星の子どもが以前に登場していて、“それから星の子ども(の骨)はどうなったか?”が説明されています。

- (21) ふし=ぬ ふぁー=ぬ ふに=や つす=つてい なり
 星=の 子ども=の 骨=は フン=と なって
 “(大蛇に食べられた)星の子どもの骨はフンとなって” [19]

5.3.8 ん

「ん」は共通語の“も”に相当し、共通語でもてどうんむにでも、同じことをつけたす累加の意味(「私のご飯を食べて、太郎もご飯を食べた」)に使われますが、『星砂の話』では少し特殊な使われ方をしています。共通語でも同じ場合に「も」が使われますが、「何でも」の「も」のように、疑問詞(「誰」「何」など)と組み合わせさせて「すべて」の意味になっています。(22)では、「のーしてい=ん」「何としても」の“も”に相当する「ん」が使われています。

(22) のーしてい=**ん** ゆるさるぬ=つてい

何として=**も** 許されない=**と**

“何としても許されないと(言って、海の大蛇を使って星の子どもをみんなかみ殺した)” [16]

5.3.9 どう

「どう」は、現代日本語に相当するものがないので、「これぞまさに」という表現や古語にある「ぞ」とよく訳されます。文中の新しい情報や、強調したい個所につきます。(23)では「星の子ども」は新しい情報ではありませんが、大蛇にかみ殺されてしまった星の子どもたちが今はお母さん星のそばで光っているのだという印象的な場面なので、「星の子ども」に「どう」がつけられているようです。

(23) ほーらさ ある ふあー+ふし=**ぬ=どう** ひかりていん ゆー

たくさん ある 子ども+星=**が=ぞ** 光っている 丁寧

“たくさんの星の子どもが光っています” [31]

「どう」は竹富島の人が日本語で話すときに使う「が」に似ている場合があります。ただし、5.3.1とは異なり、動作の主体を表す「が」ではないものにつくので、東京などの人が話す共通語の「が」とは違います。例えば(24)では「共通語で」という手段を表す句に「が」がつけられています。「共通語で」は「話す」主体ではありません(話す主体は「私」です)が、「どんなことばで話そうか?」という疑問が頭に浮かんでいて、「共通語で」という部分に焦点を当てたいので「が」が使われています。てーどうんむにの「どう」も、この「が」によく似ています。

(24) 共通語で**が**話そうね。

5.4 動作を表すことば

ここでは動作を表すことば(動詞)の4種類の形を紹介します。文を終わる形として非過去と過去の形、非過去を否定する形、そして文を終わらずに続けて言う形を紹介します。その他の動詞の形もありますが、『星砂の話』を理解するにはこれだけで十分です。その他の形は、『竹富方言辞典』(前新 2011)の中の「竹富方言の音韻・文法概要」を参照してください。

5.4.1 非過去の形

非過去の形は、『星砂の話』では、話し手がこれから行う動作を表すのに使われています。

(25) ふし=**ぬ** いんの=**ぬ** はなし=**ゆ** **っしやる** ならー

星=の 砂=の 話=を する 丁寧

“星砂の話をします” [2]

日本語と似ていて、文を終わる非過去の形は「う」の母音で終わります。(25)の「っしやる」

はローマ字で書くと“ssharu”で、「う」で終わっています。

あとに続く人/ものを詳しく説明するときにもこの形が使われます。(26)では、「あつがる」があとに続く「七竜宮神」を詳しく説明しています。

- (26) いんな=ゆ あつがる ななりゆーぐーしん=や
海=を あずかる 七竜宮神=は
“海をあずかる七竜宮神は” [13]

5.4.2 否定の形

非過去の形を否定するには、(27)のように「ぬ」を使います。

- (27) のーしてい=ん ゆるさるぬ=つてい
何として=も 許されない=と
“何としても許されないと(言って、海の大蛇を使って星の子どもをみんなかみ殺した)” [16]

5.4.3 過去の形

すでに終わった動作を表すために過去の形が使われます。日本語と似ていて、「た」で終わります。(28), (29)の「とうきつた」「命じた」「かみくらすた」「かみ殺した」が過去の形の例です。

- (28) うさん=ゆ する よーい とうきつた
お産=を する よう 命じた
“お産をするよう命じた” [9]
- (29) ふし=ぬ ふあー=ゆ とーつてい かみ+くらすた
星=の 子ども=を 全部 かみ+殺した
“星の子どもをみんなかみ殺した” [18]

5.4.4 続けて言う形

文を言い切らずに続けて言うときには、「い」の母音で終わり、これも少し日本語に似ています。(30)では「なり」「なり・なって」の部分が、ローマ字で書くと「nari」であるように、「い」の母音で終わっています。これは言いたいことがまだ続くことを示しています。言い切るときは「い」ではなく「う」がついて、「なる naru」となります。

- (30) ふし=ぬ ふあー=ぬ ふに=や つす=つてい なり
星=の 子ども=の 骨=は フン=と なって
“(大蛇に食べられた)星の子どもの骨はフンとなって” [19]

(31)でも同じように、「いじ iji」「言い(言って)」の部分が続けて言う形です。言い切りの形は「いず izu」です。

- (31) に=ぬ ふぁー=な ある ふし=や いーじゃ=つてい いじ
 子=の 方向=に ある 星=は お父さん=と 言って
 “子の方角にある星はお父さんと言って” [3]

この、続けて言う形に「てい」が後続することもあります。この場合も、続けて言う形は「い」で終わっています。(32)では「うり uri」「降り(降りて)」,(33)では「あちー achii」(集め(集めて))がそれぞれ続けて言う形で、これに「てい」がついています。(32)の「うり」と「てい」の間にある「っ」は、このように発音されているため表記しましたが、「てい」と違うのかなど、もっと調査をしないとわかりません。

- (32) かいさる ひるさる ばい=ぬ いんな=い うりってい
 美しい 広い 南=の 海=に 降りて
 “美しい広い南の海に降りて” [8]
- (33) くぬ ふし=ぬ ふぁー=ぬ ふに=ゆ とうみ+あちーてい
 この 星=の 子ども=の 骨=を 探し+集めて
 “この星の子どもの骨を探し集めて” [22]

5.5 様子や特徴を表すことば

てーどうんむには、様子や特徴を表すことば(形容詞)には、「さ」があらわれます。日本語では「美しい」,「広い」など,“い”で終わることが多いですが,てーどうんむにはまったく違いますね。(34)の「かいさる」「美しい」,「ひるさる」「広い」,(35)の「ほーらさる」「多い」が形容詞です。『星砂の話』の中で使われる形容詞は名詞を説明する機能を果たしていて,この使い方では「さ」のあとに「る」をつけて「さる」となります。

- (34) かいさる ひるさる ばい=ぬ いんな=い うりってい
 美しい 広い 南=の 海=に 降りて
 “美しい広い南の海に降りて” [8]
- (35) ほーらさる ふぁー=ゆ なし+うとうし おーとぬ
 多い 子ども=を 産み+落とし いらっしやっただけど
 “たくさんの子どもの産み落としていらっしやっただけど” [12]

5.6 文の終わりにつくことば

文の終わりについて,文を丁寧にしたたり,話し手の態度を表す表現があります。日本語でも,「今日はいい天気だね」と言うか「今日はいい天気だよ」と言うかで,少し文の雰囲気が変わってきますね。ここでは『星砂の話』に出てくる「ならー」と「ゆー」について説明します。

「ならー」は文の終わりについて,文を丁寧な表現にします。日本語でいう“です”,“ます”に近い働きをします。(36)の「ならー」がこの例です。

- (36) ふし=ぬ いんの=ぬ はなし=ゆ っしゃる ならー
 星=の 砂=の 話=を する 丁寧
 “星砂の話をしませす” [2]

「ゆー」の働きはよくわかっていませんが、これも文を丁寧に行しているのではないかと考えられます。(37)の文の終わりに「ゆー」がついていますね。

- (37) ほーらさ ある ふあー+ふし=ぬ=どう ひかりていん ゆー
 たくさん ある 子ども+星=が=ぞ 光っている 丁寧
 “たくさん星の子どもが光っています” [31]

5.7 物語テキスト

- [1] ふし=ぬ いんの=ぬ はなし
 星=の 砂=の 話
 星砂の話
- [2] てーどうん+しま=ぬ ふし=ぬ いんの=ぬ はなし=ゆ っしゃる ならー
 竹富+島=の 星=の 砂=の 話=を する 丁寧
 竹富島の星砂の話をしませす。
- [3] に=ぬ ふあー=な ある ふし=や いーじゃ=つてい いじ
 子=の 方向=に ある 星=は お父さん=と 言つて
 子の方角にある星はお父さんと言つて
- [4] んま=ぬ ふあー=な ある ふし=や あんまー=つてい いじ
 午=の 方向=に ある 星=は お母さん=と 言つて
 午の方角にある星はお母さんと言つて
- [5] ある ひ あんまー=ぬ うさん=ゆ したつていぬ くとう=し
 ある 日 お母さん=が お産=を したいとの こと=で
 ある日、お母さんはお産をしたいということ
- [6] ていん=ぬ だいまよーしん=に っしゃりた
 天=の 大明神=に お話をした
 天の大明神にお話をした
- [7] だいまよーしん=や てーどうん+しま=ぬ
 大明神=は 竹富+島=の
 大明神は竹富島の
- [8] かいさる ひるさる ばい=ぬ いんな=い うりつてい
 美しい 広い 南=の 海=に 降りて
 美しい広い南の海に降りて

- [9] うさん=ゆ する よーい とうきつた
お産=を する よう 命じた
お産をするよう命じた。
- [10] あんまー+ふし=や いじ おーる とうーる
お母さん+星=は 言い なさる とおり
お母さん星は(大明神が)おっしゃったとおりに
- [11] てーどうん+しま=ぬ ばい=ぬ いんな=い うりてい
竹富+島=の 南=の 海=に 降りて
竹富島の南の海に降りて
- [12] ほーらさる ふあー=ゆ なし+うとうし おーとぬ
多い 子ども=を 産み+落とし いらっしゃったのだけど
たくさんの子どもの産み落としていらっしゃったのだけど
- [13] いんな=ゆ あががる ななりゆーぐーしん=や
海=を あずかる 七竜宮神=は
海をあずかる七竜宮神は
- [14] ばー あががる くぬ いんな=ゆ ぶね+ふし=や かつてい=し
私が あずかる この 海=を 母+星=は 勝手に
自分があずかるこの海を,お母さん星が勝手に
- [15] さん=ぬ ばしゆ=つてい ひこつたる くとう=や
お産=の 場所=に 使った こと=は
お産の場所に使ったことは
- [16] のーしてい=ん ゆるさるぬ=つてい
何として=も 許されない=と
何としても許されないと
- [17] いんな=ぬ ふー+むぬ=ゆ ひかいてい
海=の 大きい+もの=を 使って
海の大蛇を使って
- [18] ふし=ぬ ふあー=ゆ とーつてい かみ+くらすた
星=の 子ども=を 全部 かみ+殺した
星の子どものみなかみ殺した。
- [19] ふーむぬ=ぬ ほつたる ふし=ぬ ふあー=ぬ ふに=や つす=つてい なり
大蛇=が 食べた 星=の 子ども=の 骨=は フン=と なって
大蛇が食べた星の子どもの骨は大蛇のフンとなって
- [20] ばい=ぬ いんな=ぬ なぐい うちあぎらりたる ふし=ぬ いんの なり
南=の 海=の 波に 打ち上げられた 星=の 砂に なった
南の海の波に打ち上げられた星の砂になった

- [21] しま=ぬ あいみしやし=ぬ かん=や
島=の 東美崎=の 神=は
島の東美崎の神は
- [22] くぬ ふし=ぬ ふぁー=ぬ ふに=ゆ とうみ+あちーてい
この 星=の 子ども=の 骨=を 探し+集めて
この星の子どもの骨を探して集めて
- [23] どうー=ぬ すば=な にかがい
自分=の そば=に 祈り
自分のそばで祈って
- [24] いちか うい+ていん かいし ぴーるん=てい
いつか 上+天 返して あげる=と
いつか天に返してあげようと
- [25] かんがい おーったる くとう=はら
考えて いらっしやった こと=から
考えていらっしやったことから
- [26] おん=ぬ かんぶなじ=や こーろ=ぬ ばい=ぬ ふし+いん=ゆ
御嶽=の 神女=は 香炉=の 灰=の 星+砂=を
御嶽の神女は、香炉の灰の星砂を
- [27] とうし+ぐとう いらい かいる くくる=や ぬくし おーった
年+ごと 入れ 替える 習慣=を 残し なさった
年ごとに入れ替える習慣を残された。
- [28] しま=ぬ かんぶなじ=ぬ うかぎ=し
島=の 神女=の おかげ=で
島の神女のおかげで
- [29] ふし=ぬ ふぁー=や ういていん あがりり
星=の 子ども=は 天に 昇れるので
星の子どもは天に昇れるので
- [30] んま=ぬ ふぁー=ぬ ぶね+ふし=ぬ すば=な
午=の 方向=の 母+星=の そば=に
午の方角にあるお母さん星のそばに
- [31] ほーらさ ある ふぁー+ふし=ぬ=どう ひかりていん ゆー
たくさん ある 子ども+星=が=ぞ 光っている 丁寧
たくさん星の子どもが光っています。

5.8 おわりに

この概要では、『星砂の話』をてどうんむにで、より詳しく部分の意味を理解しながら読め

る／聞けるようになることを目標に解説しました。『星砂の話』を通しててどうんむにに触れることで、次にてどうんむにを聞いたときに少し理解できることばが増えているかもしれません。自由にてどうんむにを使いこなせるようになるまでの情報はありますが、今後はてどうんむにがまったくわからない人でも、てどうんむにで作文できるようになるための情報も提供していきたいです。

[この後に謝辞と参考文献があるが、読みやすさの都合上、参考文献は本論全体の参考文献一覧と統合し、謝辞も本論文全体の謝辞として最後に掲載する。]

6. まとめ

本論では、沖縄県の竹富島に伝わる『星砂の話』の絵本制作と一般読者向けの文法概要の執筆過程を詳しく述べた。これによって、今後同様の絵本やその他の地域言語コンテンツを制作するときの一助となれば幸いである。実際に絵本を読んで地域言語に興味を持った一般読者からの反応を待ち、さらに改良を重ねていきたい。

謝辞

本論を書くにあたり、特に以下の方々にお世話になりました。代々伝わる『星砂の話』をまとめた物語として読み上げてくださり、度重なる質問にも丁寧に答えてくださった内盛スミさん、いつも想像力豊かな表現で楽しませてくださる「まっちゃんおばあ」こと古堅節さん、古謡を始めとした豊富な知識を背景に様々なことを教えてくださる前本隆一さん。教えていただいたものをすべて反映できていないのが残念ですが、ここに記して感謝します。なお、本文に含まれる間違いなどはすべて筆者の責任です。

NPO 法人たきどうんの阿佐伊拓さんには絵本の出版、時代考証の相談、話者の紹介など様々な場面でお世話になりました。『星砂の話』に出てくる行事を今でも行っている花城御嶽の神司である田中愛子さんには御嶽の行事にまつわることを教えていただき、伝承に関連した場所に連れて行っていただきました。島のやきものや五香屋の水野景敬さんには香炉の素材に関することなどを教えていただきました。写真家の水野暁子さんには、まっちゃんおばあや前本隆一さんのところで何度も連れて行っていただいたり、どこの誰に何を聞けば良いのか教えていただきました。お世話になった方々の名前をすべてあげられず申し訳ありませんが、竹富島の様々な人々に助けていただいて完成させることができました。ありがとうございました。

この研究成果は、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(国立国語研究所 機関拠点型基幹研究プロジェクト、リーダー：木部暢子)、「名詞標識の意味地図」(科研課題番号 15J03835、代表：中川奈津子)、「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」(科研課題番号 16K16824、代表：山田真寛)、「地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェクトを核とした琉球諸語の復興研究」(博報財団、代表：山田真寛)、「絵とともに語ることばの未来 多言語表記民話絵本のブックデザイン」(DNP 文化振興財団、代表：山本史)の助成を受けています。また本論の一部を第 60 回 NINJAL サロン (2017 年 6 月 6 日) で発表し、コメントをいただきました。

参考文献

- ローレンス、ウェイン (1999) 「竹富島方言の a/a について」『琉球の方言』23: 165-179.
 ローレンス、ウェイン (2012) 「竹富方言アクセントと系列別語彙：附 竹富方言版『北風と太陽』」『琉球の方言』37: 1-124.
 前新透 (2011) 『竹富方言辞典』沖縄：南山舎。
 松村雪枝・山田真寛・横山 (徳永) 晶子・元木環・浅川友里江 (2016) 『みちゃぬふい』京都：言語復興の港。
 仲原穰 (2017) 「琉球語の表記について—「沖縄語」を中心に—」沖縄国際大学公開講座委員会 (編) 『しまくとぅ

- ばルネサンス』191–223. 沖縄：編集工房東洋企画。
- 西岡敏・小川晋史 (2011) 「竹富方言の音韻・文法概説」前新透『竹富方言辞典』3–63.
- 小川晋史 (編) (2015) 『琉球のことばの書き方』東京：くろしお出版。
- 上勢頭亨 (2013) 『竹富島誌 民話・民俗篇』東京：法政大学出版局。
- UNESCO ad hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) Language Vitality and Endangerment. http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Language_vitality_and_endangerment_EN.pdf. 最終アクセス日：2017/7/31
- 山田真寛 (2016) 『「言語復興の港」プロジェクト概要』京都：言語復興の港. http://docs.wixstatic.com/ugd/930cc2_38399d400549495d9471f8ab73e7af8f.pdf. 最終アクセス日：2017/7/31
- 山田真寛・下地賀代子・中川奈津子・山本史・横山 (徳永) 晶子・浅川友里江 (2017) 「言語復興の港：コミュニティ参加型の地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェクト」. 第104回日本方言研究会. 関西大学. 2017/5/12.
- Yamada, Masahiro, Fumi Yamamoto, Akiko Yokoyama-Tokunaga, Kayoko Shimoji, Yurie Asakawa and Yukie Matsumura (2017) Picture book project for all. 5th International Conference on Language Documentation and Conservation (ICLDC). University of Hawai'i at Mānoa. 2017/3/5.

Making the Picture Book *A Tale of Star Sand* in Taketomi and Writing a Grammar Sketch for a General Audience

NAKAGAWA Natsuko^a YAMADA Masahiro^b

^aJSPS Research Fellow (PD), Chiba University / Project Collaborator, NINJAL

^bInstitutional Research Office, NINJAL

Abstract

We describe the procedure of making a picture book, *A Tale of Star Sand*, in Taketomi Dialect, which is spoken in Taketomi Island, Yaeyama, Okinawa, Japan, and of writing a grammar sketch for a general audience about this dialect. Taketomi Dialect (*teedun+muni* “Taketomi+speech”) belongs to the Ryukyuan languages, Yaeyaman, and is only spoken by elderly people over the age of 70. It is one of the endangered languages of Ryukyuan. We first give an overview of the “Port Language Revitalization Project,” to which this picture book project belongs, and explain why we linguists made a picture book (and other contents such as badges and stamps) with other professionals and local people. We then document the procedure of writing a grammar sketch for a general audience of the picture book in order for them to understand the book in Taketomi Dialect. The grammar sketch includes the writing system and pronunciation, case, topic, and focus particles, the paradigms of verbs and adjectives, and sentence final particles. We addressed ourselves not only with respect to clarity, but also regarding questions that non-linguists tend to come up with (e.g., which is “correct,” X or Y?). The grammar sketch avoided exhaustiveness, which academic grammar sketches tend to focus on, and aimed at explaining the expressions in the picture book, the advantages and disadvantages of which are to be discussed shortly. Finally, we include the grammar sketch and text in the picture book. We hope that our paper will help similar contents to be developed for other endangered languages in the future.

Key words: endangered language, language revitalization, Ryukyuan languages, Yaeyaman, Taketomi dialect